

ウマ娘 関西から来た新人トレーナー

レオパルト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大阪から一流チームを作ることを見て、トレセン学園に現れた新人トレーナー、新城颯大は初日から大食いのウマ娘と関西弁を話すウマ娘に遭遇する。

「あなたのその腐った性根を叩き直したるわ！」

新人トレーナーは果たして一流チームを作ることができるのか？

目次

| | |
|----------|---|
| 就任、そして邂逅 | 1 |
| 加入、白い稲妻 | 4 |

就任、そして邂逅

トレセン学園、それは日本の中央シリーズに出場するウマ娘の養成機関で同時にウマ娘を育てるトレーナーの腕を競う場所でもある。そんな場所に一人のある男が現れる。

「おーさすが日本一のトレセンやな。大阪でもこれほどのサイズはなかなかあらへんかったからな」

そう言った一人の男、新城颯大は今日からトレーナーとしてチームを編成し、ウマ娘達を勝利へ導くためトレセン学園にやって来た。正門を通ると、全身緑の服を着た女性に話しかけられた。

「新城さん、おはようございます」

「えっと、すみません。あなたは？」

「失礼、申し遅れました！駿川たづなです！改めて、よろしくお願います、新城さん」

「こちらこそよろしくお願います、駿川さん」

駿川さんは歩き出し自分もそれについて行く。向かっているのはグラウンドだろうか、ゼッケンをつけ準備運動しているウマ娘やウマ娘に群がるトレーナーの人ばかりが出来ていた。

「まずは選抜レースを見て頂いてそこから気になる娘をスカウトしてください。次のレースの出走までは時間があるのでここで待機してもらっても興味のある娘に声をかけて貰っても大丈夫ですよ」

グラウンドに着くと駿川さんは仕事に戻るようここでお別れをした。次のレースまで20分ぐらいあるので辺りを見渡して手軽なベンチに座る。いきなりウマ娘に声をかける自信はないので、まずは心の準備を整えるためここに来る前にコンビニでかった通常より少し大きいおにぎりを三個取り出して口に放り込もうとする。するとすぐ後ろの方から大きなお腹の鳴る音がする。音のした方を振り向くとゼッケンを着てお腹をさすっているのと身長の高い二人の芦毛のウマ娘が話していた。

「相変わらずお腹の音デカいなー、オグリは」

「すまないタマ、何か食べるものを持っていないか？」

「あいにく今はレース前やさかい、なんもないわ。どうしたオグリ?」
するとオグリと呼ばれた腹を空かしているウマ娘がこちらを、正確には俺の手元にあるおにぎり三つに視線を送ってくる。

「あそこに……あそこに……おにぎりが三つもある!」

「オグリ、あんなトレーナー今までウチの学校におったか?」

「おにぎり……おにぎり……おにぎりが三つも……」

「あかんわこれ。オグリ、今からちよつと交渉してきたらまつきー!」

視線に若干、おびえながらもおにぎりの封を切って食べようとする
と、身長の高い方のウマ娘に待ったをかけられる。

「その兄ちゃん!ちよつと食べるん待ってくれへんか!」

「どうした?さつきから聞いてたけどそのお腹のすいている娘に俺
のおにぎりを渡したらいいのか?」

「そういうことや、話が早くて助かるわ。オグリ!このトレーナーが
オグリにおにぎりくれるって言うてくれてはんで!」

そう言われると腹を空かしている方のウマ娘は全速力でこちらに
来て、俺のおにぎり三つを受け取り口を開け食べ始めた。

「そういや、あんた見たことないな。このシーズンやし、新しいトレ
ナーかなんかか?」

「そうだ。新城颯大、これが俺の名前だ。君の名前は?」

「ウチはタマモクロス。で、そこで最後のおにぎりを頬張ってるのは
オグリキャップや」

「そうか、よろしくタマモクロス。ん?ちよつと待て、最後のおにぎり
?もうあのデカめのおにぎり全部食ったんか?早すぎやろ!あれ結
構デカかった気がするやけど!」

語尾が若干、関西弁になつて驚きを隠せなかった。するとタマモク
ロスはそれにしつかり反応してきた。

「オグリは大食いやからな……ちよい待ち新城、あんた今、エライ流暢
な関西弁で喋らんかったか!?あんた関西出身か!」

「!いや、まあそうだが……」

「なんで、あんた標準語で喋つとんねん!なに東京に魂、売つとんねん

！」

「いや、関西弁って割と目立つし……」

「関西人が関西弁捨ててどうするんや！よっしや決めたで、あんたのその関西人として腐った性根を叩き直したる！」

「どういう意味だ？」

「あんた、どうせ新人トレーナーやろ！ちようど次のレースにウチとオグリが出走するんや！そのレースでその腐った性根を叩き直したるわ！」

そう言い放って芦毛のウマ娘、タマモクロスはオグリキャップと共にレース場に去って行った。後にこの二人が「白い稲妻」と「芦毛の怪物」だと言うことを駿川さんから聞いた。

加入、白い稲妻

あの会話から数分後、レース場の第四コーナーから少し遠目の位置でさつき俺に啖呵を切ったタマモクロスの走りを眺める。このレースは第1レースということもありオグリキャップやトウカイテイオー、ナリタブライアンと言った期待の逸材と呼ばれるウマ娘が出走しているが、当のタマモクロスはゴール手前でオグリキャップとナリタブライアンに差されて3着に終わった。だが、確かにただのビツクマウスではなかったようだ。実際、注目株のトウカイテイオーよりは先着している。ちなみに1着と2着でゴールした二人は自分のチームにスカウトしようとする他のトレーナーにもまれていた。トウカイテイオーの方は列をなしていた。オグリキャップは戸惑っており、ナリタブライアンの方は今はまだチームに所属する気は無いと断っていた。そしてレースを終えたタマモクロスが俺の元に歩いてきた。

「どや、ウチの走りは？あんたの腐った性根は少しは治ったやろ！」

「タマモクロス、その、なんだ、俺のチームに入ってくれないか？」

「ええで！やけど一つ約束や！ウチと話す時は関西弁や！」

「……まあ、ええわ。タマモクロス、これからよろしく頼むわ」

「新城、いやトレーナーやな、よろしゅう頼むで。さてとまずは、オグリを助けなあかな」

オグリキャップは未だにスカウトしようとするトレーナーの波にもまれていた。ちなみにナリタブライアンの方は本人の意向もあって誰もスカウトするのを諦めたようだ。トウカイテイオーの方は相変わらず列が出来ている。

「そやトレーナー、まだチームメンバーウチだけやろ？オグリもスカウトすればええやないか！」

「え、あの人混みの中からオグリキャップをスカウトすんのか？」

「せや、チーム結成には最低でも何人かいるやろ？だったらウチとトレーナーも面識のあるオグリはうってつけやで」

「まあ、それもそうやな。よっしゃ、タマモクロス……言いにくいからタマでええな！行くで！」

「トレーナーまでタマ言うなー!」

オグリキャップをスカウトしようとするトレーナーの人混みに突撃し道を切り拓いて何とかオグリキャップの元に到着した。

「あ、あの時の……えつと……」

「新城颯大だ、まだ名乗って無かったな。オグリ、俺のチームに入らないか?」

「……いいのか?タマじゃなくて?」

「タマは俺のチームに入ってくれたから大丈夫だ」

「そうか、なら私は新城のチームに入るよ」

すると既にオフアーをしていたトレーナー達が文句を言い出す。

「ちよつと、既に私たちのチームにスカウトしていたのよ!」

「そうだ!割り込みはするいぞ!」

「横取りする気だろ!」

だが人混みから遅れて追いついたタマが大きな声を上げる。

「アホか、あんたら?トレーナーならウマ娘の意思を尊重せんでどないすねん!」

「……………」

沈黙した彼らはとぼとぼと敗北感を露わにしてその場を去っていた。

「これでオグリとタマが入ってくれたけどせめてあと一人ぐらいいてくれると助かるんやけどな……」

「ウチの知り合いやとクリークかあのエセ江戸っ子かそれぐらいやけど、二人とももうトレーナーついたって聞いたし」

「じゃあその二人はあかん」

「まあ、ウマ娘はかなりおるし、あんたの性格やったら探せば見つかるやろ」

「せやな、じゃあどっかに飯食いに行こうや!」

「ほんとか……」

「……後悔しても知らんで」

「?どういうことだ?」

「知らんねやったらええわ……」

この日、俺の財布から紙幣が消えた。